

わが友イワン・ラブシン (1984)

MOI DRUG IVAN LAPSHIN
MY FRIEND IVAN LAPSHIN

メディア 映画

ジャンル サスペンス 犯罪

製作国 ソ連

色彩 Color

初公開日 1989/03/25

公開情報 ソヴェクスポルトフィルム提供／日本海＝ニワ・フィルム

【解説】

「道中の点検」のA・ゲルマンが父ユーリの原作を映画化。スターリン粛清前夜、未だ運命の希望を人々が胸に灯し、住宅不足による雑居生活に耐えていた頃の田舎町を背景にした犯罪心理サスペンスで、当時の状況に疎い者に親切な映画ではないが、その寂涼感漂う荒々しいカメラの力で、いつまでも観る者の心に火種を残す、謎めいた映画だ。物語は一人の男の少年時代の回想に始まる。彼の父の友人イワン・ラブシンは優秀な刑事で、彼の目からみても、逞しく頼れる存在であった。イワンは反革命の犯罪集団を追って、その巢窟を襲撃する。呪いの言葉を投げかける、そこにたむろする連中は悪鬼のように見えるが、こうした排他された者を生むのも革命の一側面なのだ。彼らの反抗で仲間の一人が瀕死の重傷を負う。イワンには好きな女がいたが、激務のせいですれ違いが続き、彼女はいつしか親しい友に心移していく。彼が動き回る町の様子はどこか虚無に囚われており、実際に追いかける事件とは別の謎が首をもたげる。それが何なのか釈然としない。ただ少年は、現在の回想の主はそれを今よりはよい時代だったと感じるだけだ。河を取り囲む町の風景も大分変わった。ここは現在は“都市”と呼んでさしつかえない規模の市になった……。当時の“暗い予感”を説明するのではなく、ひたすら“感じさせる”、ロシア製フィルム・ノワールとでも呼ぶべきか。

【クレジット】

監督	アレクセイ・ゲルマン	Aleksei German
原作	ユーリ・ゲルマン	Yuri German
脚本	エドゥアルド・ヴォロダルスキー	Eduard Volodarsky
撮影	ワレーリー・フェドーソフ	
音楽	アルカジー・ガグラシヴィリ	
出演	アンドレイ・ボルトフ	Andrei Boltnev
	ニーナ・ルスラーノワ	Nino Ruslanova
	アンドレイ・ミロノフ	Andrei Mironov